

第8回 全国高校生

環境スピーチ コンテスト

報告書

テーマ（課題）

- ① 「自然エネルギーと私たちの未来」
- ② 「SDGsのために、今、私たちができること」



【主催】

千葉商科大学

【後援】

環境省／文部科学省／経済産業省／千葉県／市川市／公益社団法人環境科学会／一般社団法人日本計画行政学会／
一般社団法人環境情報科学センター／日本環境共生学会／一般社団法人日本環境教育学会／日本地域学会／国際影響評価学会（IAIA）日本支部／
日刊工業新聞社千葉支局／毎日新聞出版株式会社

目 次

はじめに	02
概要・ご挨拶	03
過年度実績	04
受賞者	05
コンテストチラシ	06
審査員・実行委員会	07
千葉商科大学賞（最優秀賞）「2,400kmのネットワーク」	08
優秀賞「カワシンジュガイの保全から学んだもの」	09
優秀賞「昆虫食が世界を救う～JKとざざ虫の挑戦～」	11
特別賞「自然の先生～ニホンミツバチが教えてくれたこと～」	12
入選「おかわりできる地域環境づくりへ」	14
入選「フェリーの上から見えた未来」	15
入選「多自然川づくりについて考える」	16
入選「とちぎの未来のために」	17
入選「100人のたった「1」のアクション」	18
入選「食事の選択」	19
入選「歴史を知り、実践する私のSDGs」	20
本選の風景	21
結果発表会	22
受賞者喜びの声	27



はじめに

千葉商科大学 学長

原科 幸彦



「全国高校生 環境スピーチコンテスト」を、コロナ禍のもとですが、昨年に続き今年も開催することができました。通算8回目になります。本選は2022年12月1日～2日にオンラインで行われました。

このコンテストは、日本の将来を担う高校生に、環境問題やエネルギー問題などの重要な社会課題を考え、どのようにしたら持続可能な社会を築いていけるか、自分自身の考えを発表してもらおう場として開催するものです。そこで、「自然エネルギーと私たちの未来」及び「SDGsのために、今、私たちができること」の2つのテーマを設定し、そのどちらかを選び、スピーチをしてもらいました。

オンラインでの実施なので、最終審査ではビデオを作成し送るというハードルの高い方法になるため応募者は限られてしまいますが、参加しにくい分、意欲的な内容のものが多数でした。スピーチ内容など事前の書類審査の結果、11名が入選と決まり、ビデオ録画を事前に送付したうえで本選に臨み、審査員の質疑に応答しました。

本選での発表は、自由な発想から、環境・エネルギー問題の解決やSDGs推進に対する提言がなされた素晴らしいものばかりでした。本選での質疑応答は、高校生らしくフレッシュで、吉原毅委員長はじめ7名の審査員が、独創性、説得力、表現力を基準に慎重に審査を行いました。その結果、最優秀賞1名、優秀賞2名、特別賞1名、学校賞1校を決定することができました。

本冊子には、コンテストで入賞した、これら11名全てのスピーチを掲載してあります。一人でも多くの方々に彼らの主張を聞いて頂ければ幸いです。

最後に、本コンテストに応募していただいた全国の高校生の皆さん、高校関係者の皆さんにお礼を申します。また、後援をいただいた環境省、千葉県、市川市、さらに、関連諸学会やメディアの皆様から心から感謝を申し上げます。

来年も、環境スピーチコンテストを開催する予定です。全国から多くの高校生の皆さんが参加してくれることを期待しています。

2023年3月



環境スピーチコンテスト概要

- 応募資格：日本国内の高校に在学している環境に関心のある高校生
- 応募期間：2022年7月11日（月）～2022年8月31日（水）※当日消印有効
- 選考方法：応募書類の審査を行い、本選出場者を決定
- 審査及び基準：専門家による審査会を設け、厳正に行う
 - 【書類選考】
 - ・独創性、構成力、論理性、根拠により審査する
 - 【本選】
 - ・スピーチと質疑応答により内容の独創性、構成力、論理性、根拠、表現力、応答力を総合的に審査する
 - ・スピーチは5分以上7分以内とし、5分未満及び7分を超過した場合は減点とする
- 表彰：千葉商科大学賞（最優秀賞）…1名（賞状、表彰盾、奨学金10万円）
 - 優秀賞…2名（賞状、表彰盾、奨学金5万円）
 - 特別賞…1名
 - 学校賞…1校

ご挨拶

審査委員長

吉原 毅



第8回「全国高校生 環境スピーチコンテスト」の開催
おめでとうございます。

今回も、全国から多数の高校生の皆さんが、環境・エネルギーなどのSDGsについて日頃から考え、研究されたことをウェブ上で発表してくださいましたが、どれも高い問題意識に裏付けられた、専門的で高度な発表で、審査員としても大いに感銘を受け、多くのことを学ばせていただきました。

CUCは、世のため人のために尽くす「治道家」たることを理念として掲げていますが、持続的な未来のために環境問題に熱い関心を寄せる高校生の皆さんが、日本全国にこれほどいることを知り心より嬉しく存じます。

本コンテストに応募していただいた全国の高校生の皆さん、高校関係者の皆さんに心よりお礼を申し上げますとともに、来年も全国の多くの高校生の方々が奮って参加されますことを祈念いたします。



「環境スピーチコンテスト」 過年度実績

	本選開催日	応募者数	本選 出場者数	スピーチテーマ
第1回	2007年 6月23日(土)	9	9	①地球温暖化 ②もったいない
第2回	2008年 6月21日(土)	96	14	①洞爺湖サミットに望む ②もったいない
第3回	2009年 7月25日(土)	85	15	①今、私たちにできること ②もったいない
第4回	2010年 7月24日(土) <small>※政策情報学部創設10周年記念事業</small>	70	13	①今、私たちにできること ②生物多様性
第5回	2018年 9月23日(日・祝) <small>※本学創立90周年記念事業</small>	53	12	①自然エネルギーと私たちの未来 ②持続可能な暮らしのために、今、私たちが できること
第6回	2019年 9月22日(日)	91	11	①自然エネルギーと私たちの未来 ②SDGsのために、今、私たちができること
第7回	2021年 11月25日(木) 26日(金)	22	11	①自然エネルギーと私たちの未来 ②SDGsのために、今、私たちができること
第8回	2022年 12月1日(木) 2日(金)	75	11	①自然エネルギーと私たちの未来 ②SDGsのために、今、私たちができること

- 注1. 第4回は本学政策情報学部創設10周年記念事業として、第5回は本学創立90周年記念事業として実施した。
 注2. スピーチテーマは、2つのうちいずれかを選択する。
 注3. 新型コロナウイルスの感染防止対策として、第7回以降はスピーチ動画及びオンラインでの質疑応答により本選を実施した。





環境スピーチコンテスト 受賞者

千葉商科大学賞（最優秀賞）

青森県 名久井農業高等学校 3年
佐々木 昌虎 「2,400kmのネットワーク」 <テーマ2>

優 秀 賞

栃木県 馬頭高等学校 2年
大山 弘貴 「カワシンジュガイの保全から学んだもの」 <テーマ2>
長野県 上伊那農業高等学校 2年
伊藤 颯香 「昆虫食が世界を救う～JKとざざ虫の挑戦～」 <テーマ2>

特 別 賞

長野県 上伊那農業高等学校 2年
飯塚 咲絵 「自然の先生～ニホンミツバチが教えてくれたこと～」 <テーマ2>

入 賞

北海道 士幌高等学校 2年
田村 勇翔 「おかわりできる地域環境づくりへ」 <テーマ1>
長崎県 九州文化学園高等学校 2年
國嶋 元乃 「フェリーの上から見えた未来」 <テーマ1>
栃木県 馬頭高等学校 2年
齋藤 心聖 「多自然川づくりについて考える」 <テーマ2>
栃木県 小山北桜高等学校 1年
佐川 聖葵 「とちぎの未来のために」 <テーマ2>
高知県 高知国際高等学校 1年
石丸 玲衣子 「100人のたった「1」のアクション」 <テーマ2>
北海道 市立札幌開成中等教育学校 4年
能瀬 颯菜 「食事の選択」 <テーマ2>
東京都 文化学園大学杉並高等学校 2年
岡部 美希 「歴史を知り、実践する私のSDGs」 <テーマ2>

学 校 賞

静岡県 浜松開誠館高等学校



審査員

審査委員長	吉原毅	(城南信用金庫 名誉顧問)
審査員	井上麻矢	(劇団こまつ座 代表取締役社長)
	大森恵子	(環境省 関東地方環境事務所長)
	笹谷秀光	(千葉商科大学 基盤教育機構 教授)
	篠瀬祥子	(日刊工業新聞社 総合企画部 部長)
	松下和夫	(京都大学名誉教授 公益財団法人 地球環境戦略研究機関シニアフェロー)
	戸澤涼花	(千葉商科大学 商経学部2年生 自然エネルギー達成学生機構 (SONE) メンバー)

実行委員会

委員長	原科幸彦	(千葉商科大学 学長)
副委員長	手嶋進	(千葉商科大学 基盤教育機構 准教授)
委員	田中 信一郎	(千葉商科大学 基盤教育機構 准教授)
	浜島直子	(千葉商科大学 基盤教育機構 准教授)
	小野 聡	(千葉商科大学 商経学部 専任講師)
	大野 開	(千葉商科大学附属高等学校 教諭)
	戸塚 浩一郎	(千葉商科大学 学長事務室長)
	長谷川 ひとみ	(千葉商科大学 学長事務室 室長補佐)
	藤村 祐子	(千葉商科大学 経営企画室 室長補佐)
	忍田 香	(千葉商科大学 学長事務室 職員)
奥野 晶子	(千葉商科大学 学長事務室 職員)	

※2022年4月1日現在





千葉商科大学賞（最優秀賞）

「2,400kmのネットワーク」

青森県 名久井農業高等学校 3年

佐々木 昌虎



名農、世界一！

入学して間もない頃に入ってきた青少年ストックホルム世界大会グランプリのニュースはあまりにも鮮烈でした。受賞された先輩たちは既に卒業していますが、同じ環境班に入った今、レジェンド達の凄さを肌で感じています。

彼らの功績は「三和土」を使って乾燥地域の土壌流出抑制と集水システムを確立したことです。三和土とは、日本古来の土壌固化技術で、土と砂と消石灰を水で練り固めたものです。

受賞から1年後、沖縄県の石垣市赤土協議会から、現在の環境班である私のところに思いがけないオファーが舞い込んできました。

石垣島といえば、白い砂浜とエメラルドグリーン的大海、そしてマンタやウミガメが見られる日本有数の観光地です。

しかし、このような絶景地が今、降雨による土壌流出で、珊瑚礁が広がる海に壊滅的な被害をもたらしているというのです。

「何とか三和土で食い止められないか。」

という必死な依頼でした。

主任研究員の私は「美ら海を守れ！」の合言葉のもと、仲間とともに早速、現地の赤土「島尻マージ」を送ってもらい、試作に挑戦。ところが、レジェンドたちが試行錯誤の末に見出した土と消石灰と水の配合は通用しませんでした。島尻マージは特殊な粘土で構成されているため固化しないのです。

そこで、思い切ってこれまでよりも多くの石灰を投入することにしました。と言っても、適正量は全くの手探り状態。両極端な試験区を設定し、的を絞っていくしかありません。さらに困難を強いられたの

が、結果が出るまでの時間です。三和土は作ってから固まるのに約2週間かかりますが、多くは水に入れて5分も経たずに壊れてしまうのです。それでも諦めずに試行錯誤を重ね、少しのニガリを加えることで、ようやく水中でも耐え抜く、黄金比を導くことができました。

「よし、後は行くだけ！」

石垣島へ出向いて、製作技術を現地の高校生にレクチャーし、大がかりな環境活動に発展させる、これが当初の狙いでした。しかし、コロナ第6波の影響で計画は頓挫。

ピンチはチャンス！と、浮いた時間を三和土の品質向上に注ぎました。実は耐久性向上のため、多くの石灰を投入したことで、アルカリ分を強めてしまう点が気になっていたのです。そこで、透過水成分を調査。結果を見て、メンバー一同目を見開きました。なんと、三和土を通過した水は土に浸透することでアルカリ分を弱めることが分かったのです。三和土から透過するナトリウム分も気がかりでしたが、稲藁を添加することで解決しました。これらの対策は、土壌流失が特に多い畑への設置を想定すると、十分な手ごたえを掴んだといえます。

それでも現地視察は叶わず、やむなくオンラインでの実演。確かに便利なツールですが、材料を混ぜ合わせる際の力加減が伝わらないなど、画面越しのコミュニケーションの限界を感じました。

不完全燃焼で終わった交流から2ヶ月後、今度は沖縄本島の圃場で三和土を使った簡易堤防をつくって欲しい、というオファーが届きました。沖縄本島の赤土は「国頭マージ」。島尻マージとは性質が異なるため、また一から実験が必要ですが、現地に行



けるなら、と張り切って試作を再開。

迎えた当日、実演会では、北部農林高校と辺土名高校の生徒に、水加減や空気の抜き方など、細かいポイントを伝授。いざ圃場に入ると、三和土製作には最悪の雨でしたが、おかげで赤土流出の現場に直面することができました。水流による圃場の崩壊や海面に広がる茶色い濁りは、想像していた以上に深刻でした。

翌日に行われた交流会には、高校生の他に素潜り漁師など漁業関係者も参加されており、「最近潜っていると、全く生き物がない無の世界があるんです。不気味で怖くなります。」と、水中での被害の様子を教えてくださいました。他にも、赤土流出問題に取り組むNPOや環境コーディネーターからは、赤土だけでなく、圃場に施用された化学肥料も流出し、湖沼の富栄養化も引き起こしているなど、問題の複雑さも知ることができました。そして、分かったことは、自信満々だった三和土は赤土問題解決の切り札にはなり得るが、万能材ではないということ。他の技術と組み合わせるなど使い方に工夫が必要であるということです。交流

会終盤に行われた分科会では、

「うちの畑で三和土を使えないか。」

など、子どもも大人も前のめりになって意見交換をしている姿は、まさに郷土への愛着そのものでした。

沖縄は今年、本土復帰50年目を迎え、街中に復帰を祝うロゴがありました。辛い過去を乗り越えたからこそ、国土を敬い、国土の保全に勤しむ、熱い県民性を感じました。

私はこれまで環境問題解決には技術がすべてと信じて、研究に没頭してきました。しかし、技術開発に加えて、郷土を愛する心と仲間づくりも同じくらい大切なんだということに気づかされました。

レジェンドの研究から派生したこのプロジェクトは、赤土だけでなく、私の思いも固めました。

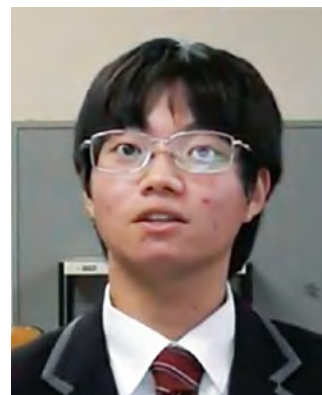
私は大学で持続可能な環境活動を学び、将来は農業教師として21世紀型の環境教育、e-STEM教育を実践したいと考えています。そして、いつか赤土流出の解決に立ち会い、未来の生徒とともに世界一のオーシャンビュー、美ら海を眺められる日を目指して…。

優秀賞

「カワシンジュガイの保全から学んだもの」

栃木県 馬頭高等学校 2年

大山 弘貴



私は全国で唯一、内水面について専門的に学べる水産高校に通っています。水産の勉強を始めてから淡水二枚貝の研究に力を入れるようになりました。研究を始める以前は淡水貝類など興味もなかったの

ですが、研究をしていくと貝類の魅力や面白さに興味を惹かれました。研究をしてから貝のことだけではなく河川環境についても学ぶことができ、人からの視点だけではなく河川に生息する生物にとって住



みやすい環境について深く考えるようになりました。

カワシンジュガイは淡水二枚貝ではやや大型な冷水性の二枚貝です。しかし、渓流域のような急で激しい流れは好まず、上流部の丘陵地の緩やかに流れる小河川や水路に生息しています。100年以上生きると考えられていますが、栃木県では詳しく調べられていません。繁殖方法はグロキジュームと呼ばれる幼生がヤマメの鰓に寄生し、魚の養分を吸って成長していきます。つまり、ヤマメの生息水域とカワシンジュガイの分布は重なり、ヤマメのいない水域には生息できません。また、河川工事により河床が改変されてしまうと当然その水域は全滅に近い状況になってしまいます。別の言い方をすると、カワシンジュガイの生息に適した河川や水路はかなり限定されてしまっています。事実、カワシンジュガイは近年、生息数が全国的に激減し、今年の1月には環境省から販売及び販売目的の採捕を禁止する「特定第二種国内希少野生動物種」に指定されました。特定第二種に指定される以前はタナゴ類の産卵母貝として非常に人気であり、倫理がないタナゴ愛好家やネット販売者によって乱獲が相次ぎました。北海道でカワシンジュガイを9万匹以上採集し、ネットショップで販売する人が現れるなどカワシンジュガイの乱獲は極めて悪質そのものでした。私の通う馬頭高校では数年前からカワシンジュガイの保全活動を行っており、私も数名のクラスメイトとともにこの活動に参加し、生息状況の調査、カワシンジュガイが生息している自治体の自然環境係や水利組合など水路を管理されている方々と情報交換などを行ってきました。また、カワシンジュガイを保全するための方策についての啓発活動も行ってきました。

今年の春、カワシンジュガイの生息水路が様変わりしていたとの情報を耳にし、現場を調査すると重機によって河床が平らに工事されていました。土手に寄せられた土砂や踏み固められた砂泥の中をよく

見ると、カワシンジュガイの大量の死骸が見つかりました。いくら法律で乱獲を制限しても河川工事で多くの生き物を殺してしまえば大きな矛盾となってしまいます。治水のためか、農業のためか工事の理由はわかりません。ただし、もう少し生き物に配慮をした工事は行えなかったのかと悔やみます。工事の影響はカワシンジュガイだけではなく、水域に生息していた多くの生き物にも及びます。しかしながら、より残念なことは、この出来事の数ヶ月前、私たちは水路がある役場を訪れて河川環境係の方々の前で保全活動の発表をしていました。その中でカワシンジュガイ生息河川の工事の際は事前にカワシンジュガイを捕獲し、一時的に私たちの高校の実習池で預かって飼育し、工事が終了したら水域に戻しますのでご協力させてくださいというお願いをしたばかりでした。非常に残念な結果を招いてしまいましたが、工事を行った地元の方々または事業所が悪いわけではありません。河川や生き物に対する知識が不十分なまま工事をする体制そのものが変われば改善されると私は思います。希少な生き物が生息している地域の住民の方々はもちろん、行政や建設事業者にも生物に配慮した河川との向き合い方が伝わるよう、啓発していかなくてはなりません。このことは、カワシンジュガイのみにあてはまることではありませんし、希少種であるかないかも関係のないことです。より深く見つめれば、私たち人間が自然と向き合う目、そのものが問われているのではないのでしょうか。私は高校生活において淡水二枚貝についてより深く探究しながら今後も啓発活動を行い、生物の生息の目線に立った河川環境のあり方について伝えていきたいです。高校卒業後は大学に進学し、生き物や河川についてさらに深く学習し、我々人と自然と生き物との共生に貢献していきたいと考えています。



優秀賞

「昆虫食が世界を救う ～JKとざざ虫の挑戦～」

長野県 上伊那農業高等学校 2年

伊藤 颯香



寒さが身に沁みる真冬の1月、川瀬に入り網を上げるとそこにはうじゃうじゃとうごめく得体の知れない幼虫たち。これが私と昆虫食との出会いです。長野県伊那谷の天竜川に伝わる冬の風物詩、ざざ虫漁。この日は虫踏み許可証を身に着けた漁師さんと共に川瀬に入り、両手で四つ手網を持ちながら足で石の裏をガリガリと掻く伝統のざざ虫漁を体験しました。ざざ虫とは、ザアザア、ザザ、ザザと流れる川の瀬に棲みついている虫の総称であり、特に食用にする虫を「ざざ虫」と言います。これらは主にトビケラ、カワゲラ、ヘビトンボの仲間の幼虫で、ウグイやヤマメなどきれいな水に澄む魚の餌となっています。

ざざ虫漁の作業自体は単純です。しかし、実際にやってみると川の流れと足場の悪い中の作業でとても大変ですが、驚くことに漁師さんの平均年齢はなんと80歳。漁を終えると「川の富をいただきました。ありがとうございました」と深々と頭を下げる漁師さん。自然や命に感謝し生きていく昔の人々の心が見えました。そしてざざ虫佃煮の試食をする頃にはグロテスクな見た目にも慣れ、エビのような香ばしいおいしさにつられ私は昆虫食の魅力にとりつかれたのです。しかしこの飽食の時代になぜあえて昆虫を食べるのか？無理して食べる必要があるのかと感じる人も多いと思いますが、私が昆虫食をすすめるには2つの理由があります。

1つ目の理由は昆虫食は伊那谷の食文化でありこれからも受け継いでいくべき伝統だからです。ここ伊那谷はざざ虫、イナゴ、蜂の子など昆虫食が古くから伝えられています。現代では全国的に均一な食生活になりつつありますが、地域特有の食文化を継

承していくことが大切だと私は思います。

2つ目の理由は、昆虫食は「古くて新しい」食文化だからです。昆虫を食べるのは原始的、食糧に乏しい国や地域で食べるものと考えられる人もいますが、それこそナンセンス。そもそも世界では多くの地域で昆虫が食べられており、2018年からはEUで食用昆虫の取引が自由化されているほか、昆虫をサプリメントとして飢餓で困っている国で使用することも検討されているのです。名古屋女子大学の片山直美先生からは、今、地球規模の食料問題を解決する手段として昆虫食は見直されているということをお聞きしました。世界の食料問題の解決を目指す国連は、特にたんぱく質のひっ迫を警告しています。しかしながら現代の畜産業は大量の穀物を飼料として消費する上に廃棄物による環境負荷も大きいことが課題となっています。そこで提案されているのが食用昆虫なのです。

そこで私は昆虫食で飢餓を救うべく、2つの活動を進めています。昆虫は一般的に「見た目がグロイ」というのが魅力でもあり欠点でもあります。これだと若い世代に理解を得るのは難しいのも事実です。昆虫食の文化を発展させるには食べ方を工夫して需要を増やすことと、発想の転換が必要だと私は考えました。そこで商品開発したのが「ZAZATAINふりかけ」です。昆虫が苦手な人でも手軽に昆虫からたんぱく質を摂取できるようにと考えました。2つ目はざざ虫の養殖実験です。SDGsの飢餓をなくするという観点からするとざざ虫の生産量はまだまだ太刀打ちできません。そこで、学校の研究の一つとしてざざ虫の養殖実験を行い、あまり知られていない生理生態を解明しようと取り組んでいます。昆虫1



匹は決して大きなものではありません。しかし、その小さな体には世界を救う無限の可能性が秘められ

ています。小さな虫から世界へ羽ばたけ昆虫食、私は今日も研究中です。

特別賞

「自然の先生 ～ニホンミツバチが教えてくれたこと～」

長野県 上伊那農業高等学校 2年

飯塚 咲絵



「おじいちゃん、ハチ見せてよ!」「危ないからだめだ」

私の祖父は、50年程前から、伊那市長谷でニホンミツバチを飼育しています。私とニホンミツバチとの出会いは、小学生の頃です。何度も巣箱を見せてと祖父に頼み込み、小学2年生の春にやっと養蜂の作業に連れて行ってくれました。祖父からは、「ミツバチは敏感な生き物だから驚かしてはいけないよ。」と何度も言われました。恐る恐るそーっと、巣箱に近づくと想像していたよりも多くのミツバチが飛び回っているのに驚きました。しばらくすると、私の手のひらに一匹のミツバチが止まりました。「あ、くすぐったい」。今まで怖かったミツバチを、こうして間近で見ると、ふさふさした毛がなぜだかマフラーを巻いているように見えて、なんだか可愛く思えました。この出会いからきっかけに、私はニホンミツバチについて調べるようになりました。

ニホンミツバチとは日本の固有種であり、セイヨウミツバチと比べ体が小さいのが特徴です。また、生産される蜜の量も少なく、ニホンミツバチの蜂蜜はとても高価で取引されています。祖父は、ニホンミツバチのことを「自然の先生」と呼んでいます。祖父に習って私も、ミツバチの行動を観察する

ようになりました。ミツバチの朝はとっても早いです。日の出とともに外に出て蜜源を探し、日没まで活動が見られます。ニホンミツバチはセイヨウミツバチよりも比べ、多様な花の蜜を集めるのも特徴のひとつです。蜜源や花粉源を見つけ、仲間に知らせます。こうして集めた蜜をもとにできた蜂蜜は、様々な味や香りがして、何とも言えない美味しさです。

ニホンミツバチ一匹が一生で作る蜂蜜の量は、ティースプーン1杯とされています。そのことを知り、今まで以上に蜂蜜が貴重なものだと感じました。また、ニホンミツバチの仕事は蜂蜜の生産ではありません。訪花行動により、植物の受粉も行っています。ニホンミツバチは野生植物だけではなく、農作物など様々な植物の受粉に関わり、日本の環境や農業を支えているのだと気が付きました。

ニホンミツバチと日本人との関係は深く、約1,400年もの歴史があります。環境や農業だけではなく、医薬品としての利用やハチの巣の構造であるハニカム構造は建築物にも利用されています。ニホンミツバチは様々な面で、日本人の生活を支えてきたことがわかります。また、ミツバチがいなくなると世界の7割の農作物が消えると言われています。今、私たち人間の活動により自然のバランスが



崩れ、動植物に大きな影響を与えています。もちろん二ホンミツバチの生息にも影響があると考えられます。陸の豊かさを守るためにも「自然の先生」に学び、若い世代に伝える必要があると思いました。

そこで、現在私は学校での養蜂に挑戦中です。「人間の都合だけでは自然と上手くは付き合っていけないよ」という祖父の言葉を胸に、私はこれまで以上にミツバチの目線に立ち真剣に向き合いました。これまで意識して自然を見ることがなかった私が、花を見ればミツバチの姿を探すようになり、私が見る世界が一気に広がりました。実際に学校周辺を歩いてみると、人間が見て綺麗だと思う花や植物はあっても、ミツバチのための蜜源は少ないことがわかっ

たのです。そこで私は、耕作放棄地に蜜源となる植物を植える活動を行っています。同時に蜜源を調査し、蜜源マップを作製。地域の資源の豊かさの調査をすることにしました。はちみつの花粉分析によって、同定を行い、今後に活用していく予定です。これらの調査を元に、ミツバチから教わったことを小中学生に伝えるのが私の役目だと考えています。ミツバチ自体はとても小さなものですが、ミツバチは陸の豊かさの一つの指標となる生き物です。私はこれからも、人々が古来より自然と共生してきた伝統文化を守り、人間とミツバチと自然が心地よく豊かに生活できる地域づくりを目指します。





入賞

「おかわりできる地域環境づくりへ」

北海道 土幌高等学校 2年

田村 勇翔



「今日もうまいご飯だ、おかわり。」

私の元気の源「食」。食べることが大好きな私は、食について学びたいと思い農業科のある土幌高校へ入学しました。授業から農業は地域環境と密接に繋がっていることを学び、小学生のゴミ拾いボランティアを思い出しました。集めたゴミを見て「汚い、重い」。小さな手にずっしりとゴミの重さを感じたのを思い出しました。

2年生から始まる課題研究の授業では、地域環境である防風林について研究しています。防風林は、春先の十勝風と呼ばれる突風から農地を守る大切な役割を担っています。近年GPSトラクタの普及により、電波の妨害になるなどの理由から、防風林が伐採され減少しているのが現状です。

今年の4月下旬、十勝地方に強風警報が出ました。低気圧と重なった十勝風は、瞬間最大風速20m以上となり、畑の表土が飛びました。この時期は、農作物の播種作業となるため、強風による被害がないか心配になりました。苗半作という言葉があるように、農作物は初期生育によって年間の収量に大きく影響します。

これらの経験から地域環境の仕事をする行政職員となり、地域環境作りに携わりたいと考えています。

1つ目は、植樹活動です。森林の植樹活動はよく聞きますが、防風林ボランティアを計画しています。防風林の設置は、農家の努力により始まったとされています。現在防風林を設置するにあたり地方自治

体から補助金制度があります。これに加え、ボランティア制度を組み合わせ、地域の文化である防風林を守っていきたいです。SNSで#防風林で検索し、DMで連絡を取ることで新たな可能性が見えてくるのではと考えています。

2つ目は、防風林の普及活動です。農家と農家の防風林を繋ぐ役割をしていきたいです。現在、各農家が所有している防風林は、個人の土地のため、隣の人が伐採してしまうと、その部分のみ無くなるため、ビル風と同様に、強風が作り出される仕組みとなります。そのため、普及活動を通して、防風林が地域を繋ぎ、地域で農地を守る意識ができたらと考えています。

3つ目は、農業と林業を繋ぐ役割をしていきたいです。行政では、農業は農業の担当の人が対応する。林業は、林業の担当の人が対応するとそれぞれの役割があります。現在農家の方や十勝総合振興局森林室の方々々と連携し活動しています。これからは同じ地域として農業と林業、農業土木が連携して活動していきたいです。

農地を守り、地域を守り、文化を守る防風林。地域環境を我々が制御するだけでなく、地域と合わせる、将来を見据えた、未来につながる環境づくりをしていくべきだと考えます。

「今日もうまいご飯だ。ところで知っている？持続可能な農業には防風林が関わっているって！」



「フェリーの上から見た未来」

長崎県 九州文化学園高等学校 2年

國嶋 元乃



私の日常は、フェリーに乗り込むことから始まります。離島に住む私は、隣の市の高校に船で通学しています。船が港を出てしばらくすると島全体が見えます。島には風力発電設備があり、ゆっくりと回る羽根を船上から眺めるのが私のお気に入りの時間です。

船に乗りながら、私は自然エネルギーについてよく考えるのですが、それについて以前から一つの思いがあります。それは、今の生活の規模や水準を維持したままで、消費しているエネルギーをそのまま自然エネルギーに置き換えることは到底無理ではないか、ということです。

特に都会はインフラも整備され、とても便利で重要な機能を果たしています。しかし、あれだけ人が集まり、さまざまな活動を行えば膨大なエネルギーが必要です。そのような途轍もないエネルギーをすべて自然エネルギーに置き換えることは至難の業です。

一方、地方の例ですが、冒頭にも述べたように私の住む島には風力発電設備があります。島内の電力のすべてを賄うことはできませんが、周囲は海で風を遮るものがなく、発電の効率は良好です。市役所に今後の風力発電について質問してみると、現在、国と協同で洋上風力発電施設の計画があるとのことでした。これが完成すると、私の住む島はもちろん、県全体の約半分の世帯の電力を確保できるという、胸が躍るような話も聞くことができました。自然エネルギーと名前が付いている訳ですから、私の島の風力発電のように自然豊かな場所がエネルギーも豊富に得られます。全国それぞれの地域において

も、太陽光、地熱、水力など得やすい自然エネルギーが多くあるはずです。

そこで私たちは何をすべきでしょうか。それは、私たちの考え方を根底から変えることです。日本はこれまで一極集中の手法で繁栄してきました。それがエネルギーの過剰消費につながり、自然エネルギーへの転換を困難にしています。つまり、これからは都会から地方へ人や社会機能を分散させ、自然エネルギーでも賄えるように必要エネルギーのダウンサイジングを図ればよいのです。もちろん多少の不便さはあるでしょう。しかし、今回のコロナ禍の中で取り組んだオンライン授業やリモートワークなどでカバーできることも、私たちは知りました。さらに今後、メタバースなどの仮想空間技術が発展すれば、人の移動が大幅に抑えられエネルギーは節約できます。このように新しい技術も地方への分散化の力にもなるのです。

そしてもう一点、大切なことがあります。人はエネルギーだけで生きているのではないという点です。人が豊かに生きるためには、人としての文化も必要です。私たちの島にはお祭りがあります。小さなお祭りですが、島民にとって大切な伝統行事です。地方にはこのような文化がありますが、人がいなくなればこの文化も消滅します。人がそれぞれの場所で、思い思いに日々のくらしを続けることができる。これこそが最も大切なことではないでしょうか。だから自然エネルギーを考えるということは、文化やくらしも未来に持続させることとイコールなのだとは私考えています。

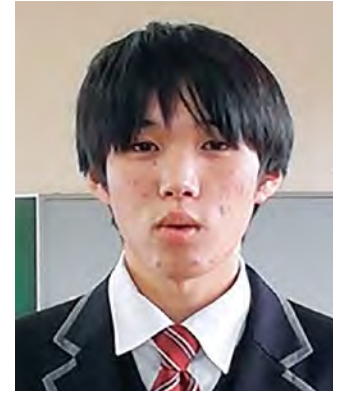


入賞

「多自然川づくりについて考える」

栃木県 馬頭高等学校 2年

齋藤 心聖



皆さんの身近にある川や水路。ここにどんな魚、生き物が棲んでいるのだろう、と一度は考えたことがありますか。今回は川や水路がどんな状況にあるのかについて話したいと思います。

今の状況を一言で表すと、たいていの河川において「魚がとてもピンチ」です。要因は種々ありますが、ここでは「河川工事の影響」に焦点を合わせて話していこうと思います。近年、異常なまでの豪雨により河川の氾濫が頻発し、甚大な被害が生じています。結果、河川工事が盛んに行われています。残念ながら、大半の工事が魚にとって好ましくないものとなっています。緊急の工事により、護岸がすべてコンクリートで固められ、流れの変化のない平らな川が増えてきています。皆さんの想像以上に魚にとっては過酷です。我々人間で簡単に例えると、ライオンが放たれた何も無いグラウンドで1日中生活することと同じです。魚の天敵は主に水鳥で、サギ類やカワウなどが例に挙げられます。水鳥が目光らせる中、何も障害物のない平らな川に魚が放たれたらどうなるでしょう。なぜそんな川になってしまうのか。それは堰の設置と堆積物除去工事の影響が大きいです。川はぐねぐね曲がりながら浸食と堆積を繰り返して進んでいきます。浸食とは河床や河岸が削られることであり、堆積により水が流れる体積が減ってしまい、氾濫しやすくなってしまいます。人は予防策として堰の設置と堆積土除去工事をします。結果として、堰により水や土砂が堰き止められ

て大きい石が供給されなくなり、堆積土除去により大きい石がなくなってしまうからです。大きい石は川にとって流れの変化を産む重要な資源であり、魚にとっての隠れ家や生息場所となるのです。

この状況をどう改善したらよいか。解決策の糸口が「多自然川づくり」です。治水や利水という目的をベースにして、河川全体の営みを視野に入れ「人間も魚もハッピーな川をつくろう」というのが多自然川づくりです。大それた工事が必要なわけではありません。河川工事の際にほんの少しだけ工夫を加えるだけでよいのです。例えば、堆積土除去工事の際に、大きい石は残すようにする。土のうの中に詰めるものを普通の土にするのではなく、現場の川の砂利を使って濁りを抑える。堆積土除去によって生じた石を護岸の根元に据え置くことによって護岸の浸食を防ぐ効果をもちつつ流れに変化をつくるなど、容易にできることはたくさんあるのです。しかし現状は多自然川づくりはごく一部でしか行われていません。なぜ普及しないのか。理由は極めて簡単で、多自然川づくりということば、内容、概念が知られていないからです。つまり、私たちが川をよくするためにできることは多自然川づくりの存在を知ってもらう活動です。このスピーチもその一環として応募させていただきました。これからも可能な限り多自然川づくりを広める活動をしていきたいと思っています。



入賞

「とちぎの未来のために」

栃木県 小山北桜高等学校 1年

佐川 聖葵



私が住む栃木県は、かつて大きな公害事件が起きました。それは、「足尾銅山鉱毒事件」。明治時代に始まった足尾銅山の開発は銅の生産と共に周辺地域の環境を一変させました。銅山の排水や煙によって水辺に生息する生物は死んでいき、農作物は枯れていったそうです。この鉱毒事件の影響は、現在でも大きな爪痕を残しています。人の手によって破壊された自然環境は、すぐに元に戻ることはありません。将来にまで影響が続きます。

この状況を目の当たりにしたのは、高校入学後に参加した足尾銅山植樹活動です。活動では、私たち高校生の手で育てたドングリの苗木を植えました。自らの足で緑が失われた山に向かい、往復1,800段もの階段を歩いていかなければなりません。足場の悪い中で仲間と一緒に1本ずつ丁寧に苗木を植えていきました。約20年の間に27万本以上の苗木が足尾の山に植樹されたそうです。延べ20万人以上の手によって少しずつ足尾に緑が増えていきました。ただ、苗木を植えた後に管理するボランティアの方々が高齢となっており、足尾の緑を維持することが大きな課題となっています。

植樹活動によって環境保全への関心を持った私は、足尾銅山も含まれる渡良瀬川流域の自然を守りたいと強く思いました。そこで次に参加した活動は、渡良瀬遊水地で行われている「ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦」です。渡良瀬遊水地は1922年に渡良瀬川の氾濫を防ぐ目的でつくられ、日本最大の遊水地となっています。また、3,000種を超える貴重な動植物が数多く生息することで知られ、2012年にラムサール条約に登録されました。遊水地には貴重な植物が生息している一方、セイタカアワダチソウなどの外来植物の増加が問題となってい

ます。セイタカアワダチソウから分泌されるアレロパシーが原因で周辺の植物の成長が阻害され、希少植物が減少しています。そこで私たちは手作業でセイタカアワダチソウを一本一本抜き取り、確実に外来植物を減らしました。半日で抜き取った量は1トン以上。この活動は多くの人の手が必要となりますが、貴重な遊水地の植物を守ることに繋がります。

現在、世界で4万種以上の生物が絶滅の危険性があるとされているそうです。人間による森林伐採や土壌汚染、水質汚染などの自然破壊によって、二度と元に戻すことができない状況にあります。未来の世代のために豊かな自然を残していくには、私たち高校生が中心となって地域の環境保全活動に参加するべきです。そして、活動を通して学んだことを後輩たちや未来の世代に伝えることが必要です。過去の世代や今の世代が自然を破壊した後、私たちが保全しなければ未来の人たちが豊かな生態系に囲まれた自然を知ることができません。起きたことを責めるのではなく、今私たちができることを地道に行うことが大切です。SDGsの目標15「陸の豊かさを守ろう」を達成することは、次世代の人々や豊かな生態系を守ることに繋がります。

日本で初めて起きた公害、足尾銅山鉱毒事件の解決に努力した田中正造はこのような言葉を残しています。「真の文明は、山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし。」と。この言葉は、没後100年以上たった今でも私たちの心に突き刺さります。地域の環境問題に向き合う私たちが忘れてはいけない田中正造からのメッセージです。そこで私は、地域の豊かな自然を守る一員となって仲間たちと一緒に地域の環境保全のために今後も活動し続けたいと思います。



入賞

「100人のたった「1」のアクション」

高知県 高知国際高等学校 1年

石丸 玲衣子



「環境問題の解決に向けて、緊急で取り組むべきです。あなたの行動が世界を救います」この言葉は何度も耳にし、聞き飽きたんですよ。そして私はこの言葉に追い詰められました。だから、私はそんなことは言いません。私は伝えたい。環境問題解決のためにアクションを起こすことを0から100までの数で例えると、1人で「100」の努力をする必要はない、100人で「1」の努力をするだけで素晴らしいということ。

私はクライメイトクロックと私の経験から話をしたいと思います。

1.5度の気温上昇を防ぐために残された時間をカウントダウンする、地球を救えるリミットを表したclimateclockの残り時間は、あとたった約6年です。IPCCによると、「気候変動による環境への影響のリスクは、1.5°C温暖化した世界では現時点よりも顕著に大きくなる」ということです。つまり、もう1.5°Cを超えてからは、間に合わない。

地球を救うための残された時間は、あと少ししかなく、環境問題のために緊急で取り組まないといけないということがひしひしと伝わってきます。だから、私は環境のためのアクションを緊急性を持って始めました。

私が環境問題を知った頃、環境のことを考え、とても環境に配慮した生活を送っていました。牛肉を食べない、乳製品を買わない、ペットボトルを買わない、必ずマイ箸、マイストローを持ち歩く。毎日、毎日、環境問題のことを考え、自分にできることを実践していました。このような環境問題への熱い気持ちはどんどん昂っていき、ある時から自分が環境保全のための行動をしないと罪悪感でいっぱい

なっていました。そして、環境に配慮された人でないといけないという自分に対してのプレッシャーも大きくなっていました。

だから、「環境問題の解決に向けて、緊急で取り組むべきです。あなたの行動が世界を救います」なんて言葉を私は使いません。私のように環境問題のことを考え、罪悪感でいっぱいになり、自分を追い詰めてしまう人、今まで環境問題を知らなかった人に伝えたい。環境問題解決のためにアクションを起こすことを0から100までの数で例えると、あなたは、たった「1」のアクションを起こすだけで素晴らしいということ。

そして、あなたが環境問題の解決のためにできることは、そこら中にあります。「マイストローやマイボトルを持ち歩く、環境に配慮された服を買う、家の生ごみを減らす、」といったごく普通の身近にあるCO2を減らすアクションです。

環境問題には緊急で取り組まなくてはなりません。地球を救えるリミットを表したclimateclockの残り時間は、約6年です。だからこそ、「1」という小さい力でもあなたができるアクションを起こしてほしい。SDGs13の「気候変動に具体的な対策を」のゴール達成のために、少しでもいい、小さいことでもいい、できるところから一緒に取り組んでいきたい。そうすることで、私のような自分を追い込んでしまう人も、環境のためのアクションを継続できます。あなたも、環境問題解決のために一歩踏み出すことができます。

自分を追い込んでまで、1人で「100」の努力をする必要はない、100人で「1」の努力をするだけで素晴らしい。

「食事の選択」

北海道 市立札幌開成中等教育学校 4年

能瀬 颯菜



持続可能な開発目標であるSDGsは、国連で採決された世界全体での2030年までに達成すべき目標です。SDGsには17のゴールがありますが、2022年に発表された持続可能な開発ソリューション・ネットワークとベルステルマン財団によるSustainable Development Report 2022では、日本の主要な課題が残されているゴールが6つ書かれています。ジェンダー平等を実現しよう、つくる責任使う責任、気候変動に具体的な対策を、海の豊かさを守ろう、陸の豊かさを守ろう、パートナーシップで目標を達成しようの6つです。その中で特に、つくる責任使う責任、気候変動に具体的な対策を、海の豊かさを守ろう、陸の豊かさを守るの4つのゴールに関係している「食事」について私は目を向けました。

皆さんは、食事による環境への影響を知っていますか。2019年にはEUの共同研究センターの調査によって世界で人により排出される温室効果ガスは三分之一が「食」に関係しているという論文が発表されました。その原因の一つが家畜の飼育によるものです。動物性の食材の生産は植物性の食材の生産に比べ、環境への影響が大きいです。特に牛はメタンガスの排出し、家畜による温室効果ガスの排出量は輸送機関が排出する量に匹敵するほどです。そして、より美味しい肉や牛乳を作るために、自然では食べない穀物なども与えられたり、運動が制限され、異常が生じ、より環境への負荷が高まっている商品も存在します。また、資源や水、土地の大量消費にもつながっています。途上国で育てられた大量の穀物が少量の肉のための飼料となり、先進国の人たちの

食料となるのです。これらのことを踏まえ、私は自分の食生活を環境を考えたものに改善したいと考え、今年の夏休みに植物性の食事の研究としてヴィーガンの食事を数日実践しました。環境への負荷が高いとされている肉、そして魚、卵、乳製品などの動物性食材を一切取らないというものです。実践する中で、お菓子や加工品、市販品には思っていた以上に動物性の食材が使われていることがわかりました。普段の生活から動物性の食材を取り除くという事は非常に難しかったです。タンパク質の摂取量も減少するという結果になりました。動物性の食材で溢れる現代の中で、極端に食生活を変えることは難しいことを実感しました。しかし、私たちはこれからの地球のために「使う責任」を果たさなければいけません。私たちの選択で販売されるものが変わり、生産されるものが変わります。私たちの行動や選択が現状を変化させます。私たちができることは、それは自分の食べるものを環境という視点を持って、自分で選ぶことだと考えます。最近は環境問題が注目され、動物性の食材の生産も、植物性の食材の生産も環境に配慮した商品が増えています。それらに目を向け、未来のために判断して選択することが大切です。

人間の三大欲求の一つに関係する「食事」は私たちの生活に欠かせない、重要なものです。未来を生きる私たちは、これからの地球や環境について考えて守っていかなければなりません。まずは、毎日の生活に関わる食事から行動を起こしていきたいと思えます。



入賞

「歴史を知り、実践する私のSDGs」

東京都 文化学園大学杉並高等学校 2年

岡部 美希



私がこのSDGs（持続可能な開発目標）という言葉をもとに具体的な内容まで踏み込んで初めて聞いたのは、中学校の「総合的な学習の時間」だった。授業では17のゴールの一つ一つをグループで話し合ったが、当時の私にとっては、いずれも当然の目標のように見え、同級生たちと抽象的な議論に終始するなかで、この時の私はやや否定的なニュアンスを含めて「高邁な理想だよね」と議論をまとめた。つまり、SDGsと自分の「今」が全く結びつかず、掲げられた目標が遠い世界の出来事のように感じてしまったからだと思う。

そんな「意識低い系」の私が少し変わってきたのは、2つの「点」が結びついたからである。一つ目の点は高校生になってから始めたボランティア体験で、二つ目の点は小さい頃から見続けていた歴史ドラマである。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックで学校内での学びの機会しか与えられなかった私たちの世代も、本年度に入り、ようやく社会で学んだり、体験したりできるようになった。私も運良く「中野区療育センターゆめなりあ」で、一つ目の点となる貴重なボランティア体験の機会を得ることができた。「ゆめなりあ」は心身の発達に配慮が必要な乳幼児や児童の「育ち」を支援する通園施設で、2歳から5歳の未就学児が対象の施設である。ここで学んだことは、この施設が子供たちとご両親の「緩衝材」として機能し、良好な関係を築くため、なくてはならない施設だということである。あたふたするばかりの私も、職員の方々や児童、お母さんたちからの学びを通して、社会福祉の現実に少し触れたように思う。

そして二つ目の点は、日本史の授業や飛鳥山公園にある渋沢史料館を見学して、私にとって歴史ドラマの主人公で新1万円札の顔でしかなかった渋沢栄一の社会事業家としての側面を知ったことである。渋沢は1916年にビジネスの第一線を引退するが、その際にこれから取り組むテーマの一つとして、社会福祉事業をあげている。引退の年に刊行した『論語とそばん』という有名な本の中でも、「自分のかく分限者になりえたのも、一つは社会の恩だということを知り、社会の救済だとか、公共事業だとかいうものに対し、常に率先して尽くすようにすれば、社会はますます健全になる」と述べている。こうした姿勢から渋沢は、CSR（企業の社会的責任）の先駆者としてもよく紹介されている。

もう一つ、渋沢栄一の社会事業に関する評価を紹介すると、島田昌和先生は、岩波新書の『渋沢栄一 社会事業家の先駆者』で、「社会の脆弱性を無視して、経済的な繁栄はなしえない」と渋沢の考えを高く評価している。以上のような渋沢の考えを、私なりにまとめてみると、社会事業を通じて、自身の富を社会に還元し、社会をよりよくしていこうという考え方ではないかと思う。この渋沢の考えを形にした社会事業が身寄りのない子供や老人を養う施設である養育院であり、渋沢は92歳で亡くなるまで半世紀以上、院長を務めた。

渋沢栄一の事績を知れば、明治に設立された養育院の設立の理念・理想が現代の「ゆめなりあ」までつながっていることがわかる。時代的に大きく離れているこの二つの点は、17のゴールの中で、「3 すべてのひとに健康と福祉を」と「4 質の高い教育をみんなに」を実現するものである。そう考えれば



ば、2015年に登場したSDGsも、それ以前からあるCSRも、表現は違うものの、脈々と日本の中に受け継がれてきたものであり、私の身近に元々あったものだと感じるようになってきた。

こうした私の小さな意識の変化は、「体験」だけではもたらされず、「学習」だけでたらされるものでもなかった。それぞれの小さな経験や学びが結びついて初めてもたらされたものだと思う。歴史を知

ることは、今まで捉えられなかった大きな問題や社会の抱える課題について、私たちに新たな気づきを与えてくれる。SDGsは遠い世界の目標ではない。SDGsは、大きな社会で埋没しがちな小さい私の日々の生活の中で実現するものであり、スマホやネットの中ではなく、身近な「リアル」を精一杯考え、実践する中で実現していくのだと確信している。

環境スピーチコンテスト本選の風景



■ 出場者(敬称略) ■

〈上段左から〉田村 勇翔、國嶋 元乃、大山 弘貴、佐々木 昌虎、佐川 聖葵
〈下段左から〉石丸 玲衣子、伊藤 颯香、飯塚 咲絵、能瀬 颯菜、岡部 美希



■ 審査員(敬称略) ■

〈左から〉吉原 毅、井上 麻矢、篠瀬 祥子、大森 恵子、松下 和夫、笹谷 秀光、戸澤 涼花





結果発表会

出場者別講評 ※エントリー順

「おかわりできる地域環境づくりへ」

田村 勇翔さん
(笹谷秀光審査員)



田村さん、大変いい発表をいただきました。特に食に焦点を当てて、食のみならず防風林の林まで含めて、そして地域の文化まで話を広げていただきました。私はSDGsを専門にして千葉商科大学で教えていますが、まさにSDGsの経済、環境、社会の三位一体に視点を巡らせていただいた、大変いい発表だと思います。実践もされておられますので、これからも実践活動に力を注いでいただいて、また周りの仲間と共に、発展いただくことを心より祈念申し上げたいと思います。大変良い広がりのある発表だったと思います。

「フェリーの上から見た未来」

國嶋 元乃さん
(大森恵子審査員)



國嶋さんのスピーチは、お住いの島にある風力発電から考え始めて、自然エネルギーが支える社会を作るために、これまでの考え方を根底から変えて地方分散型の社会を作るべきという、非常に論理だったご説明に加えて、豊かな地域の伝統文化を将来に引き継ぐことが大変重要と、大変幅広い視点だった主張がとても印象的でした。地域で自然エネルギーを利用できるポテンシャルというのは、ご主張のようにまだまだ大きいということがありますので、今後各種の自然エネルギーを、環境と調和した形で活用していく必要があると、そこは非常に重要なポイントだと思います。また地元が誇るお祭りや伊勢海老、森林など、地域の宝を大事にして発信していくこともとても価値があります。國嶋さんは将来、地域で活躍したいという夢をお持ちのことですので、是非そういった分野で頑張ってください。期待しています。

「カワシンジュガイの保全から学んだもの」

大山 弘貴さん
(戸澤涼花審査員)



私はカワシンジュガイについてあまり知りませんでしたが、大山さんのスピーチを読んだり聞いたりして、とても勉強になるスピーチでした。特に印象に残ったのが、法律で規制していたとしても、工事によってカワシンジュガイが死んでしまうこと、本当にその通りだと感じしております。実際にカワシンジュガイの保全を行っているということでしたので、これからも自然の多様性を守っていくために、ぜひ活動を続けてください。期待しています。ありがとうございます。



「多自然川づくりについて考える」

齋藤 心聖さん
(吉原毅審査員)



齋藤さんは大山さんと同じ馬頭高校です。馬頭高校は全国でもユニークな淡水生物の研究が行われ、淡水生物の棲息する環境保全をなさっている、とても素晴らしい学校です。齋藤さんの場合は、護岸工事がいかに魚の環境を大きく変えてしまうかについての発表でした。我々は護岸工事というと、コンクリートで護岸を固めさえすれば、洪水が防げるのでよいと思ってしまうのですが、実は水の流れの中にある小さな石は、小さな魚たちが、他の魚や天敵から身を守る大切なものなのです。そのことを齋藤さんは私たちに対して、「多自然川づくり」という言葉で教えてくれました。この概念を、護岸工事に携わる多くの方々へ伝えることによって、川の小さな生き物が生き残っていくことにつながります。このことは大変印象に残りました。これからもこうした私たちがつい気が付かないような、大切な自然を守る分野で大いに活躍いただくことを期待しております。頑張ってくださいと思います。

「2,400Kmのネットワーク」

佐々木 昌虎さん
(松下和夫審査員)



「2,400kmのネットワーク」と非常にスケールの大きいタイトルから始まって、内容を聞いてみますと、従来から日本にあった三和土（タタキ）という土壌改良剤を実験室で改良して、それを実際に沖縄などの赤土の流出に適用するという、非常にダイナミックな活動をされています。いわば実験室レベルの研究を進めるとともに、現場に出て現地の人と交流して、実際に地域の問題を解決するという、そういう非常にストーリー性のあるお話で、大変感銘を受けました。こういう形で地道に研究を続けると同時に、それを現場で課題を抱えている人たちと交流しながら問題解決するそういう取り組みを、引き続き展開していただければ素晴らしいと思います。大変良い発表だったと思います。ありがとうございます。

「とちぎの未来のために」

佐川 聖葵さん
(井上麻矢審査員)



佐川さんはSDGsの目標の「陸の豊かさを守る」を基本として発表してくださいました。今回は応募してくださいありがとうございました。足尾銅山の公害問題から、その影響が今なお続いていると佐川さんはここで問題提起をされていらっしゃいます。人の手で壊されてしまったものはすぐには戻らない、将来に影響を及ぼすとのことしっかり受け止めておられたスピーチだったと思います。私も歴史上の偉人の中で田中正造が一番好きです。明治の時代に公害問題を公にして戦うことは並大抵ではなかったと思います。その風土が生み出すのか、田中正造の気概を十分に引き継いでおられるなど思いましたし、スピーチも興味深かったです。外来植物が受ける影響、40,000種の生物が絶滅の危機にさらされていることを高校生の力でどこまで食い止められるか、静かながらしっかりとした発表だったと思います。将来的にどのような活動をされるのか、引き続き興味をもって取り組んでいただければと思います。今の私たちが将来に出来ることは沢山あると思うのですが、それでもこの先を生きる若い世代の方が意識を持ち問題を当事者として担ってくださることをとても頼もしく思いました。本当に素晴らしいスピーチをありがとうございました。





「100人のたった「1」のアクション」

石丸 玲衣子さん
(篠瀬祥子審査員)



今回のコンテストは、色々な形の発表がありました。中でも石丸さんの発表は、自分の信条みたいなところを深く掘り下げてまとめていくというスタイルでした。継続的に環境活動が続けるとはということなのか、高校1年生でここまで考えてプレゼンしてくれたことに驚きがありましたし、とても素晴らしい内容だったという風に思っております。タイトルにあります「1のアクション」について、環境活動を追い込みすぎずに、どうやって行っていったらみんなに広められるのか、そして継続していけるのか、とっても奥深いテーマです。このテーマを是非大事に、周りの方々の力を引き出しながら、表現方法ももっといろいろ探りながら、そしてちょっと楽しみながら、是非トライしてもらいたいと思っております。ありがとうございました。

「昆虫食が世界を救う ～JKとざざ虫の挑戦～」

伊藤 颯香さん
(大森恵子審査員)



伊藤さんのスピーチはまず表題がユニークで、冒頭の条件描写にとっても引き込まれました。いかにも川でざざ虫を獲っているのがわかるようないる素晴らしい描写だったと思います。ざざ虫を昆虫食として広めたいという原因が、世界の食糧問題の動向を踏まえてわかりやすく説明されていたところも素晴らしいなと思いました。さらにざざ虫を食べやすくするために、ふりかけにすることを考えられて、それも「ZAZATA I Nふりかけ」思わず何だろうと、引き付けられるような名前を付けたという、アクティブな活動を、色々な人の協力を取りまとめておこなっておられるという点が、高校生の活動として非常に評価されると思います。学校の水槽でざざ虫を養殖して増やそうということで、持続可能な形でざざ虫を食べようと、非常に重要だと思います。これからもこの活動を通じてざざ虫の利用が日本中に広まるような形で、ぜひ頑張ってください。応援しています。

「自然の先生 ～ニホンミツバチが教えてくれたこと～」

飯塚 咲絵さん
(松下和夫審査員)



「自然の先生～ニホンミツバチ」というスピーチを拝聴させていただきました。大変良かったと思います。小さいころからおじさんがニホンミツバチを育てている姿をご覧になって、自分も是非ニホンミツバチの飼育にかかわりたいという事で、スピーチ全体からニホンミツバチに対する大変温かい愛情を感じられました。そしてニホンミツバチがいかに自然と共生しながら生きているか、そしておじさんとの交流の様子、そういったことが感じられて大変温かい気持ちになる、そのようなスピーチでした。一方で、現在の日本の環境が抱えている問題、ニホンミツバチが直面している環境面からの影響、そういうこともよくわかりましたし、またミツバチ自体が実は日本の農業等へいろいろ貢献しているということも教えていただきました。私が聞いた言葉に、「ハチは蜜を集めるけれども花を傷めない」、という言葉があります。そういう風に人間も自然の一部ですから、自然と支えあいながら、ミツバチを手本として環境保全をしていく。そして、将来は飯塚さん自身もミツバチの養蜂に関わっていきたいということですので、大変楽しみにしています。大変良いスピーチでした。ありがとうございました。



「食事の選択」

能瀬 颯菜さん
(戸澤涼花審査員)



能勢さんのスピーチは「食事の選択」というタイトルから始まりますが、実際に数日間ビーガンの食事を試し、バランスよく栄養素を摂取することに苦労したことなど、細かい結果も仰っていて、とても聞きごたえのあるスピーチでした。本学でもプロジェクトの一環として、先日までプラントフードという野菜ベースの学食の提供を実施していました。これからも、ビーガンの食事は成長し、広がり続けると思うので、今回のこのようなスピーチコンテストなどの機会を利用して、ビーガンの食事について広めていくような活動を続けてほしいと思っています。

「歴史を知り、実践する私のSDGs」

岡部 美希さん
(篠瀬祥子審査員)



岡部さんの発表は、現実のボランティア活動と渋沢栄一の歴史を辿ったらSDGsで繋がっていて、自分の中で変化が起きたという、素敵な内容で構成されていて、大変ユニークな内容でした。特にリアルな言葉がちりばめられていて、実体験からくる言葉がとても印象的で、岡部さん自身が自分の中での気づきを客観的に捉えて発表されていたのが本当に良かったと思います。発表の力、そのものにも迫力があり、引き込まれるプレゼン力でした。今回、岡部さんが歴史に興味を持ったように、今後、年を重ねていくと、もっともっというろんな世界観が広がっていくと思います。その世界観を学び続けていただいて、その中でどういうアクションが出てくるのか大変楽しみです。岡部さんのプレゼン力は大変素晴らしいと思いますので、是非、今回のスピーチコンテストだけでなく、いろんなところで発信を続けていただけたらなという風に思っています。ありがとうございました。





吉原毅審査委員長 全体講評

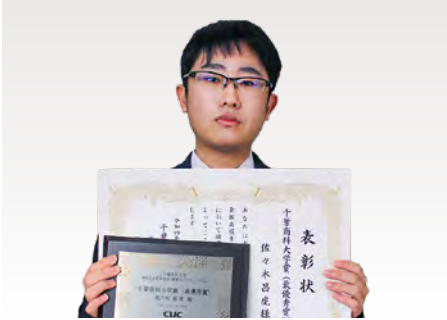
今回も全国から様々な作品が寄せられました。私はいつも感心していますが、このコンテストの応募者は、既存の理論やデータの発表ではなく、ユニークな分野を選び、高い問題意識をもって、現場主義で実践的な研究を行い、環境保全運動もなされている方々が多いという特徴があると思います。スピーチコンテストというと、論文を調べて考えをまとめて発表するというにとどまりがちですが、ご自分で社会の問題を解決していく、そのプロセスの中に皆様の情熱や思い、志がこもっていると思います。そうした世の中を良くしたいという思いの強さが環境問題を解決するために大切なポイントだと思います。また環境・エネルギーというと「脱・炭素」「脱プラスチック」という問題にフォーカスしがちですが、私たちの気が付かない「虫の話」、「土壌流失の話」、「淡水生物の話」など、様々な分野で環境破壊が起きていることに気づかされました。そういう意味で、今回は皆様に本当にいろいろなお話を教えていただいたという気がいたします。大変意欲的な作品が寄せられました、本当にありがとうございました。



受賞者の喜びの声

👑 千葉商科大学賞(最優秀賞) 👑

「2,400kmのネットワーク」 佐々木 昌虎



受賞コメント

今回はこのように素晴らしい賞をいただいたことをとても感謝しております。私は高校の2年間をかけてこのスピーチの内容である研究を進めてきて、最後の年である3年生でこの発表がいろんな人たちから認められるということは嬉しいことで、今回の賞も今後の活動の励みになります。私の研究はいろんな人に支えてもらった研究でもあるので、受賞によっていろんな人に伝達してもらって、更に活動を広めてもらえればいいなと思っています。スピーチに関しては、相手により興味を持ってもらいつつ更に研究内容についても分かりやすく説明して相手にもスッとはいっていきけるようなスピーチを心がけました。今回はありがとうございます。

【吉原審査委員長 講評】

佐々木さんは、三和土（たたぎ）という日本独自の技術を用いて環境を守るプロジェクトの発表です。三和土は、佐々木さんの学校の伝統となっている技術であり、「先輩たちはレジェンド」という言葉がありましたように、先輩方も海外の環境コンテストで賞をとるような素晴らしい活躍をされています。佐々木さんはそうした伝統を受け継ぎ、実際に沖縄の石垣島や本島の赤土被害を、三和土を使って解決できないか、ということで大活躍されました。こういった情熱、環境を守りたいという気持ち、これが現地の方々と共に共感をして貴重な体験をした、ということでした。私たちも、故郷の環境を保全したいという地元の方々の切実な思いと佐々木さんの日本の伝統技術を活用して環境を守ろうという情熱に、大変感銘を受けた次第です。誠におめでとうございます。

👑 優秀賞 👑

「カワシンジュガイの 保全から学んだもの」 大山 弘貴



受賞コメント

私はシンジュガイだけではなく、淡水二枚貝について研究をしています。スピーチが終わった後もヨコハマシジラガイという貝の保全活動に行ってきました。その際に非常に残念ですが、行政が保護することはできないということと、貝と地域住民の方との繋がりが大切であるということを実感いたしました。今回、素晴らしい賞をいただきまして、今まであまり見てこられなかった貝について、私たちの研究について見て頂いたというのは、非常に嬉しいことであり、夢にも思っていなかったです。ありがとうございます。

今後も貝の研究を続ける共に啓発活動を行い、貝のことを知ってもらうことを含めて、自然と生き物との関係、そして地域住民の方々の大切さ、人間が配慮しないとイケないというのを分かりやすく、伝えていきたいと思っています。

【吉原審査委員長 講評】

大山さんは、カワシンジュガイの保全について様々な角度から取り組まれました。地域の方々にカワシンジュガイの大切さを訴えるなど、懸命に努力しましたが、必ずしもうまくいかなかったそうです。そういう反省も踏まえたうえで、今後の環境保護活動の課題についてもお話してくださいました。例えば、多くの国民に環境保護の知識を広め、啓発することがまだまだ不足していること。具体的には、護岸工事によって死んでしまう川の生き物が、多くの魚たちの環境にとっていかに大切であるか。ヤマメなども、カワシンジュガイがなければ生きていけないのです。今回の発表で、私たちは、カワシンジュガイなどの淡水生物が自然環境の保護にとっていかに大切であるということをお話していただきました。大山さんが、様々な活動に真剣に情熱をもって取り組んだことも審査員一同高く評価して優秀賞ということになります。おめでとうございます。



👑 優秀賞 👑

「昆虫食が世界を救う ～JKとざざ虫の挑戦～」

伊藤 颯香



受賞コメント

まずはこのような賞をいただくことができ、とてもうれしく思っています。

私が今回このコンテストに参加させていただいたきっかけは、自分がやっている活動について、これから広めていくためには県内外の方にも知ってもらう必要があるので、たくさんの人に知ってもらえる良いきっかけになるかなと思い、コンテストに応募させて頂きました。この活動を始めて、私が住む伊那谷について、改めて知ることができて、これからもこの昆虫食文化を守り、育てていくために沢山の活動を行いもっといろんな人に知ってもらえるように頑張りたいと思います。今日はありがとうございました。

【吉原審査委員長 講評】

伊藤さんは地元の文化であるざざ虫のお話です。昆虫食というのは、今、世界的にも注目されているものですが、日本にも昔からこういう文化が昔からあることを教えて頂きました。また、漁師の方々が「川の幸をいただきましてありがとうございます」と手を合わせたというお話は、日本の暮らしは自然に対する感謝と共生によって成り立っていたこと、現代ではその感謝と共生の気持を失っているために環境破壊が起きていることに気づかされました。大変ユニークな研究で、また日本の伝統文化を教えて頂いたという意味で、優秀賞ということでございます。おめでとうございます。

👑 特別賞 👑

「自然の先生 ～ニホンミツバチが教えてくれたこと～」

飯塚 咲絵



受賞コメント

特別賞をいただけてとても嬉しく思っております。私は題材に悩んでいたのですが、先生に祖父がやっているミツバチに関してやってみれば、という風に言っていただけたことがきっかけでした。自分も知らないことがたくさんありましたが、このコンテストを通して、知っていくことができ、そして地域の自然環境についても知ることができるいいきっかけになりました。ミツバチがいないと、自然環境がだんだんなくなっていってしまうこと、ミツバチと自然と一緒にいるからこそ、今の自然があるということを、これからも伝えていきたいと思えます。ありがとうございました。

【吉原審査委員長 講評】

審査員全員一致で特別賞の受賞を決めました。松下先生からもお話がありましたが、養蜂を通じて1,400年も前から日本人がニホンミツバチと共生してきたこと、日本の伝統文化にもなっていること、自然環境の豊かさを示していることなど、ニホンミツバチはとても貴重な生き物であることがわかりました。そして、最後に飯塚さんがこの伝統文化を守って、人とニホンミツバチと自然が心地よく生活できる地域づくりを目指すという決意を述べられ、審査員一同感銘を受け、全員一致で特別賞に輝きました。誠におめでとうございます。



第8回全国高校生 環境スピーチコンテスト報告書

発行年月日：2023年3月20日

発行責任者：千葉商科大学 環境スピーチコンテスト実行委員会
委員長 原科 幸彦（千葉商科大学 学長）

編集：千葉商科大学 環境スピーチコンテスト実行委員会

所在地：〒272-8512 千葉県市川市国府台1-3-1

千葉商科大学 <https://www.cuc.ac.jp/>

担当 学長事務室 p-office@cuc.ac.jp

本学Webサイト



印刷・製本：株式会社共立アイコム

※無断転載禁止



リサイクル適性 (A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

